松虫鈴虫事件

　後鳥羽上皇に仕えていた女官の中に１９歳の松虫姫と１７歳の鈴虫姫の姉妹がいました。両姫は今出川左大臣の娘で、容姿端麗、教養も豊富であったことから、ことさら上皇の寵愛を受けていました。しかし両姫は、虚飾に充ちた御所での生活に馴染むことができません。いつしか心の安らぎを求めて出家を望むようになっていたのです。　１２０６（建永元）年１２月のこと、上皇は熊野へ行幸しました。両姫は清水寺に参詣し、法然の説法を聞いたとき、二人の心は晴れ目覚める思いでした。今の虚飾に充ちた生活から逃れるには、阿弥陀仏の絶対他力に求めるほかないと悟り、御所に戻ってからも、法然の説法が思い出されてなりません。両姫は申し合わせて密かに夜更けの御所を抜け出し「鹿ヶ谷の草庵」を目指しました。そして住蓮房と安楽房に思いを打ち明け剃髪出家受戒の願いを伝えました。思いつめたような、そして世を儚んだような二人の強い訴えに両上人も心を動かされ、その後に起こるであろう悲劇を予感しつつ、ついに住蓮房は松虫姫を、安楽房は鈴虫姫の髪に刃を当てたのでした。

　年が改まって正月１６日、京に戻ってきた後鳥羽上皇は松虫姫と鈴虫姫が出家した事を知って嘆きました。この事件は市井の噂では醜聞も付け加えられ住蓮房と安楽房たちの仕業であると囁かれました。上皇も憤懣やるかたなし、このうえは法然一派に鉄槌を下さねば気が済まない。

　この事件を口実にして、南都北嶺の旧仏教勢力も上皇に取り入って専修念仏教団を潰すことを企てました。そして翌１２０７（建永２）年２月、念仏停止の院宣が下されました。

この時の様子を「歎異抄」に見ると『後鳥羽上皇が政治を執っておられたとき、法然聖人は他力本願念仏宗を興し広められました。そのとき、奈良の興福寺の僧たちが、聖人は仏の教えにそむくものとして、朝廷に訴えました。

そのうえ聖人の弟子のなかに無法な行いをする者がいると、無実のうわさをたてられました。

　罪人として処罰された人々の数は次のとおりです。

法然聖人ならびにその弟子七人は流罪になり、また四人の弟子は死罪に処せられました。

法然聖人は土佐の国の番多というところへ流罪になり、罪人としての名は藤井元彦、男性、年齢七十六歳。親鸞は、越後の国に流罪となり、罪人としての名は藤井善信といいます。年齢は三十五歳。（中略）

　死罪に処せられた人びとは、善綽房西意、性願房、住蓮房、安楽房でした。これらの刑は二位法印尊長の裁定です。（以下略）』というありさまでした。

然して、住蓮房は近江国馬渕（現在の滋賀県近江八幡市）において処刑。
極楽に生まれむことの　うれしさに　身をば佛にまかすなりけり　（住蓮）
安楽房は京都六条河原において処刑されました。
今はただ　云う言の葉もなかりけり　南無阿弥陀仏のみ名のほかには（安楽）
　松虫姫と鈴虫姫は迫害を避け紀伊の粉河寺に身を隠していましたが、自分たちのために捕えられた住蓮房と安楽房のことが気になって仕方がありません。乞食姿に身をやつして京に戻って来ると、二人の僧はすでに処刑されたあとでした。両姫は上皇の許しを得ず出家したことが原因と考え、住蓮房と安楽房にお詫びしたいと鹿ヶ谷で自害しましたと伝わっています。

松虫姫・鈴虫姫の供養塔

　ところが、両姫は出家後、法然の弟子の勧めで瀬戸内海の生口島（いくちじま）の光明坊（現広島県尾道市）で念仏三昧の余生を過ごし、松虫姫は１２２４（元仁元）年１１月１８日３６歳で、鈴虫姫は１２３５（嘉貞元）年４月２９日４５歳で亡くなったというのが真相らしいです。
しかし、建永の法難を取り上げている歴史書や「歎異抄」「教行信証」などの仏教書には松虫姫、鈴虫姫の名は登場しません。
『一般的に広く知られ語られているこの松虫・鈴虫物語は、江戸末期発行の「安楽寺略縁起」や明治３２年刊行されたという「住蓮山安楽寺鹿ヶ谷因縁談」等にその起源があるように思われます。
ただ、建永の法難といわれる歴史的事件に関し、後鳥羽上皇に仕える官女が実際に出家に及んだ官女もあったと記述する文献も存在しています。松虫姫・鈴虫姫のモデルとなった女性が実際に存在し、さらに松虫・鈴虫という美しい響きの名として物語に命を吹き込んだものではないか』という見解が事実ではないでしょうか。
法然は「建永の法難」から４年後の１２１１年１１月に許されて京へ戻ってきました。そして住蓮房と安楽房の菩提を弔うために一宇の御堂を建立し「住蓮山安楽寺」と名付けました。現在の安楽寺は１６８０（延宝８）年に現在地に再建されたもので、ここに住蓮房と安楽房の墓や松虫姫と鈴虫姫の供養等も立てられています。